

# 東京 IPO 特別コラム

2020年12月30日 Vol.170

## 期待と不安で迎える新たな年

コロナで明けコロナに暮れた令和2年の株式相場も本日で大納会を迎え、来週からは令和3年という新たな年を迎えることとなります。米国では大統領選挙の決着が年明けまでずれ込み、混沌とした情勢の中ながら未曾有の金融緩和政策の潮流で顕著な株高の流れの中となり、日本株もその潮流には掉さすことができず、終わってみれば日経平均2万7000円台乗せという水準での大納会。3月には日経平均1万6000円台もあっただけに、予想外の変動を見せたということができます。経験豊富な市場関係においても、こうした市場の変動は想定できなかったのではないかと思われます。ここまでの相場展開の中で、迎える令和3年の株式相場はどうなるでしょうか。コロナ禍で変化する社会システムなどビジネス対応で生じた構造変化に対する期待とネガティブなビジネスへの不安とが入り混じり、今後も波乱含みの展開が想定されるものと思われませんが、そうした中で日本のマザーズ銘柄を主体としたIPO市場への期待感もますます高まるものと考えられます。

令和2年は2月7日のコーユレンティア（7081・JASDAQ）から始まり12月29日のオンデック（7360・マザーズ）まで93もの銘柄がIPOを実現し、好需給の下、ほぼ順調な消化ができたようです。再上場銘柄については初値が公開価格を割るなど不人気な状況が見られましたが、コロナ禍でむしろ恩恵を受けそうなAI活用型などIT系、新サービス系のマザーズ銘柄など押し並べて人気化し、公開価格を大きく上回る初値形成が見られました。企業にとってはコロナ禍でビジネスへの影響が伴う中での上場というビッグイベントを経て、成長に向けた取り組みを加速させようとお考えかと推察されますが、投資家の皆様にとっても新興市場へのIPO銘柄への期待感も大いに高まったものと考えられます。ただ、十分な分析や評価ができないまま過剰な評価をなされた銘柄にはその後の反省感も台頭し、調整の動きに入っている銘柄も数多くあるようです。このあたりは今後のビジネス拡大と十分なIR活動でカバーされるものだと期待されます。これまで主流だったリアルなアナリスト説明会に代わり、このところはオンライン化が進展しております。こうした上場後の成長を目指した企業運営と効率的なIR活動が一体となって、やや過熱気味となったIPO時に負けない評価を取り戻すことに企業は努めて頂く必要があります。

東証では現在、市場改革を推進しており、2022年4月を目標に既存市場をプライム市場、スタンダード市場、グロース市場という3つの市場に区分しようとしております。こうした中で来年のIPO銘柄も今年に負けない様々な成長性を秘めたビジネスを展開するホットな企業が登場するものと期待されます。既に年明け2月5日IPOのQDレーザ（6613）の上場が発表されておりますが、本コラムでも引き続きそうした状況をお伝えして参りたいと思いますので宜しくお願い申し上げます。それでは皆様、良いお年をお迎えください。（東京IPOコラムニスト 松尾範久）